

# 日本川崎病研究センターニュースレター

(No. 43) 2022. 1. 1

発行：特定非営利活動法人 日本川崎病研究センター

寅年の年頭に当たり 今田義夫

皆様新年明けましておめでとうございます。昨年も新型コロナウイルスに翻弄された1年になってしまいました。また、今、新しい変異株オミクロンの登場で緊張が高まっていますが、早く収まって、今年こそはかつての日常が戻ることを願っています。

さて、まずはお目出たい話題をお届けいたします。当センター理事の中村好一先生が昨11月、難病（プリオン病、川崎病）の疫学研究における永年の功績に対し日本医師会医学賞を受賞されました。この医学賞は川崎先生も、かつて受賞されており、当センターで2人目の受賞です。心からのお祝いと今後ますますのご活躍を祈ります。

昨年は、10月末に開催された2～3年に一度のビッグイベントである、第13回国際川崎病シンポジウムの共催の年でもありました。鮎沢衛、中村好一両会長（ともに当センター理事）の元、通常開催は困難でオンラインでの開催となりましたが、多くの国から出席があり成功裡に無事終了しました。シンポジウム初日には川崎先生のお人柄と多くの業績を偲び、世界各地から先生の思い出や多くの興味深いエピソードを10人以上の方々にお話しをいただくtribute sessionが設けられました。私も初めて聞く話も多く改めて川崎先生の深い人間性に接することが出来ました。冒頭、川崎先生のお元気な声、姿がビデオで流れ、多くの方が懐かしさで一杯になったと

思います。私もシアトルのM. Takahashi先生と進行役を務めさせていただき川崎先生にご指導いただいた日々を振り返ることが出来、只々感無量でした。次いで第1回のTomisaku Kawasaki memorial lectureが当センター顧問の加藤裕久先生により行われ、素晴らしい講演で世界の川崎病関係者、特に若い研究者に多くの感銘を与えました。コロナ禍の中、多くの困難を排してシンポジウムを成功に導いた両会長、役員をはじめ関係者の方々に深謝いたします。

次いで11月20日、21日の両日に鮎沢衛会長のもと、第41回日本川崎病学会が開催されました。やはり、通常開催は叶わなかったものの、ハイブリット開催がなされ、疫学、病理と二つのセミナーもとても有意義で、多くの成果を挙げ成功裡に終わりました。第42回川崎病学会は本年9月30日、10月1日の両日、松原知代会長（当センター副理事長）により大宮ソニックシティで開催の予定です。

本年も当センターは定款に沿って、原因究明へ向かって「川崎病の長期疫学研究」の継続、原因究明に結び付く研究の助成を主体に運営したいと考えています。

最後に当センターの土屋恵司理事監修の「川崎病がよくわかる本」が昨年10月、講談社から出版されました。イラストが多く使われ、とても分かりやすくできています。

皆様には、本年もよろしくご支援いただきますようお願い申し上げます。

(当センター理事長)

## 川崎病研究センター理事就任のご挨拶

### 鮎沢 衛

このたび、2021年からの研究センター理事に就任させていただいた日本大学小児科の鮎沢衛です。

川崎先生が日赤医療センターをご退職後に創設され、長く川崎病研究における国内外の学会、学術団体などとの連携によって、特に原因究明を目指す研究を支援してこられた組織として、私も個人会員として、最近の総会にできるだけ出席して参りました。理事の先生方は、皆さん川崎病の指導的立場の先生方で、どの先生も全ての分野の研究に活発に意見を出され、学会での討論とは異なる熱気を感じておりました。

図らずも3年前の第12回国際川崎病シンポジウム(12IKDS)の際に、次回も日本で開催すべきというご意見によって、本年の10月に中村好一先生と共同会頭として、第13回国際川崎病シンポジウム(13IKDS)を主催させていただくことになり、研究センターへ伺いながら準備を進めておりました。

残念ながら、川崎先生は昨年6月にご逝去され、センターに伺ってもお話しすることはできなくなってしまいました。伺うたびに、川崎先生が、ここで毎日どこかで誰かが、決定的な川崎病の原因の糸口となる情報をためのアンテナを張り巡らしておられた雰囲気を感じておりました。

そのような中で2021年10月に開催した13 IKDSには、世界中から280題を超える演題が集まり、参加者は25か国から、321

名に集まっていたいただき、原因究明に近づこうとする研究も多数発表されました。特に今回は、新型コロナウイルス感染小児例において、2~6週後に遅れて発症する「小児多系統炎症性症候群(MIS-C)」と呼ばれる病態は、好発年齢、人種こそ違うものの、一部に川崎病と共通する症状を示しており、関連の演題が40題以上発表されました。本年2月から日本でも報告され始めており、川崎病とは異なる疾患とされていますが、症状からは区別がつかない例も多いことから、病態には共通する部分があり、原因の究明に大きな手掛かりを与えるものと思われまます。

現理事長の今田先生と理事の菌部先生には、私の恩師である原田研介先生が日本川崎病研究会の運営委員長であった頃から、事務局としてのご連絡を通じて、ご指導いただけてきました。その後、日本川崎病学会となって土屋先生が事務局総務を務められ、その時期の日本川崎病学会を、高橋啓先生、鈴木啓之先生と会長・副会長として運営し、阿部先生や松原先生にも診断の手引き改訂委員会等でお世話になっておりましたが、いずれの先生とも研究センターで再び協力して活動できることを大変嬉しく思います。

IKDSの開催計画において、研究センター顧問である加藤裕久先生は、多くのアドバイスをいただきました。川崎病の冠動脈障害の発生と経時的変化の発見は世界的業績であり、中村先生とご相談の上、IKDSにおいて、' Hideko Ogawa Memorial

Lecture’を継承し、新たに’Tomisaku Kawasaki Memorial Lecture’と銘打った記念講演をお願いいたしました。

柳川先生には若輩の頃から、加藤班、原田班、柳川班と呼ばれる川崎病の班会議を通じて貴重な研究の機会を与えていただきました。IKDSでは、川崎先生への追悼として、‘Tribute Session to Professor Tomisaku Kawasaki’と題したセッションでのスピーチをしていただきました。同セッションでは、川崎先生のご家族からお言葉をいただき、座長の高橋正人先生が俳句を詠まれ、川崎先生の思い出の写真集を3分間放映させていただき、感動的なものとなりました。何らかの形で記録として残し、川崎先生を慕う皆様にお届けしたいと考えております。

去年は、川崎先生に続いて、浅井満様ともお別れする大変悲しい年になりました。浅井さんには、しばしば患者さんからのご相談を持ちかけていただき、急性期、遠隔期、また外国のお話もあり、我々も勉強させていただきました。奥様の幸子様とも連携し、川崎病の子供を持つ親の会の活動には、今後も協力を続けたいと思います。13IKDSでは、会の皆さんを通じて、海外各国の患者さんの会と連携して、今回正式なプログラムとして、Parents Meetingを行うことができました。これまで、会議などで出席できなかった先生方が多く参加され、医師たちに強い印象を与えたものと思います。

2022年初めまで13IKDSのオンデマンド

配信をしており、2人のJane (Burns & Newburger)先生による全体のサマリーが新たに加えられましたので、ぜひ、思い出しながら視聴してください。

13IKDSの準備をしながら思うことは、海外での川崎病の研究における熱心さが強く伝わってくることです。日本でも熱心に研究を進めている先生方は多いのですが、管理の経験が豊富にあり、後遺症の頻度が減っている日本では、若い小児科医にとっては、あまり困難さを感じさせない疾患になっているとも思われます。しかしその分、時に遭遇する重症例や、巨大冠動脈瘤の症例への対応に慣れた方が非常に少なくなった印象があります。

これまで、いろいろな経路で海外の患者さんからの問い合わせを受けましたが、多くが重症例で、海外ではまだまだ診断の遅れと、発熱後1週間以上は経過して古典的な症状が完全に出揃って、ようやく川崎病の診断に至った例で、大きな冠動脈瘤も合併してしまったお子さんの相談でした。研究センターに寄せられる多くのご相談について、臨床的なことについて、少しでもお役に立てることがあれば理事に就任させていただいた意義も果たせるかと思っております。

そして、研究センターでの活動を通じて、川崎病の発症が完全に防ぐことができる日を目指して、原因究明に有望な研究への支援ができればと願っております。よろしくお願い申し上げます。

(日本大学医学部小児科)

## 川崎病：最近の話題

中村好一

原稿を依頼されました。「さて、何を書いたものやら？」と思案したが、結論が出ません。そこで、川崎病にまつわる最近の話題を思いつくまでに綴ってみます。

### 第13回国際川崎病シンポジウム

2021年10月29日から31日の3日間、日本大学の鮎澤衛先生（当センター理事）と共同会長として、完全ウェブで開催しました。この学会は慣例として日本と米国交互で行うものでしたが、12回（日本）の際に「川崎先生のお体のことを考えると次も日本で開催を」ということで2回連続でわが国での開催となりました。しかしながらお元気な川崎先生のお姿はなく、代わりに追悼セッションが初日の最初に設けられました。

最も苦勞したのはプログラムです。通常の学会ですと、たとえ国際学会でも開催地の現地時間でプログラムを組めば良いのですが、ウェブだとそうは行きません。世界中の参加者がなんとか参加できるのは日本の夜遅い時間のみ。日本の午前中は欧州は夜中、日本の午後は米国が夜中、と調整が大変でした。

それでも多くの参加者に参加していただきました。また、親の会のセッションにも多くの参加者があり、盛況でした。同時通訳も質が高く、すべての発表を（私は）違和感なく日本語で聴取することができました。

関係者にはこの場をお借りして御礼申し上げます。

### 第41回日本川崎病学会

国際シンポジウムの興奮が覚めやらぬ中、2021年11月20日、21日の2日間、日本大学の鮎澤衛先生を会頭として順天堂大学をお借

りしてのハイブリッド開催でした。鮎澤先生の話によれば、予想以上に会場に参加者が集まり、結構大変だったとか...「久々に会って飲みたい」とウズウズしていた人も多かったようです（私もその1人ですが）。基調講演として順天堂大学医学部の天野篤先生（心臓血管外科学）の「川崎病における外科的冠動脈血行再建の経験から」があり、参加者の感銘を集めていました。シンポジウムとして「血管炎」と「難治性川崎病に対する治療」が取り上げられ、国際学会とは異なった趣の、有意義な学会でした。

終了後には「市民公開講座」も開催されました。

コロナ下での学会開催形式としてハイブリッド（対面とウェブの併用）が増えてきていて、本学会もそうでした。しかし、ハイブリッドが最も経費も手間もかかるため、鮎澤会頭も大変だったと思います。ちなみに私は2022年6月に日本循環器病予防学会をお世話させていただきましたが、手間と経費を考えてさっさと完全ウェブ開催を決定しました。

### 「川崎病学 改訂第2版」刊行

2018年に日本川崎病学会編集で「川崎病学」が刊行されました（診断と治療社）。その後、診断の手引き（改訂第6版）が2019年に、急性期治療のガイドライン改訂版が2020年に出されたため、これらに対応するために本書も改訂され、第2版が2021年12月に刊行されました。初版の冒頭には川崎先生の「川崎病の歴史」が掲載されており（たぶん、これが川崎先生が最後に執筆された文章だと思います）、今回の改訂でもこれは歴史的文章としてそのまま転載されています。また、これに続いて現理事長の今田義夫先生による「川

崎先生の「川崎病の歴史」が掲載されており（たぶん、これが川崎先生が最後に執筆された文章だと思います）、今回の改訂でもこれは歴史的文章としてそのまま転載されています。また、これに続いて現理事長の今田義夫先生による「川崎富作先生の履歴」が追加され、そこには川崎先生の「医学は厳しく、医療は暖かく」の色紙（実は、私が頂戴したものを掲載）と、逝去後に見つかった、最後を「夢とロマンを求めて」で締めくくる川崎先生のメモが掲載されています。やや値が張ります（6500円＋税）が、川崎病全体を知るにはもってこいの1冊です。



## 第26回全国調査

2019年、2020年の2年間の患者を対象とした第26回川崎病全国調査を実施し、ようやく結果がまとまりました。報告書はネットで公開 (<https://www.jichi.ac.jp/dph/inprogress/kawasaki/>) していますので、そちらをご覧ください。

2019年までは増加傾向にあった患者（2019年は17347人）が2020年には約3分の2の

11173人に減少しました。他の感染症と同様に、新型コロナウイルス感染症流行によるものですが、（1）ヒト→ヒト（親）接触の減少（緊急事態宣言などによる）→微生物の伝播の減少→子どもへの微生物の伝播の減少によるものなのか、（2）手洗いや消毒などの手指衛生の徹底→微生物の減少/不活化によるものなのか、現在解析を進めている最中です。いずれにしても「災い転じて…」で、これを契機に川崎病の原因に関する手がかりがつかめたら良いなあ、と考えています。

## 最後に私事

2021年11月1日に日本医師会医学賞を頂戴いたしました。研究テーマは「難病の疫学研究」で、クロイツフェルト・ヤコブ病などのプリオン病の疫学と川崎病の疫学の2本立てです。川崎病での本賞は1988年の川崎先生の「川崎病に関する研究」以来だと思います。疫学研究は1人でできるものではありません。多くの疫学者や臨床の先生方のご協力が不可欠です。また、川崎先生をはじめとする多くの師にも恵まれました。そして何よりも、個人情報として研究に使わせて頂いた患者/対象者の皆様のおかげです。この場をお借りして御礼申し上げますと共に、これを契機にさらに川崎病の諸問題解決のための疫学研究に励んで参ります。（自治医科大学公衆衛生学教室）

*Japan Kawasaki Disease Research Center*

*Japan Kawasaki Disease Research Center*

## 川崎病ペアレントミーティング報告

### 小笠原恵子

2021年10月31日朝8時からWebによるペアレントミーティングが開催されました。オンライン会議は初めての経験でしたが、思いがけず多くの参加者、視聴者を迎えることとなり、今後の参加国、参加者の広がりを期待させてくれました。今回の参加国は、スピーチは日本、アメリカ、オーストラリア、カナダ。スペインは川崎先生への追悼ビデオ上映をもって初めての参加となりました。

日本は昨年急逝された浅井満代表のメモリアルビデオ上映の時間をいただき、川崎病の家族の心の拠り所としてあり続けた、浅井さんの40年を紹介することができました。罹患した本人のスピーチ「川崎病との付き合い方」は、川崎病と後遺症にどう向き合い、受け入れ、今どう付き合っているかを体験者として語り、後に続く子供たちにとって大きな励ましとなりました。

アメリカのスピーチは今年代表を辞するMr. G. Chin への感謝の言葉から始まりました。愛息の川崎病罹患から2000年KDF (川崎病ファウンデーションUS) を創設、20年間代表を務め、会の活動に心血を注がれました。「後遺症があってもなくても KD の患者とその家族を支援する。」Mr. Chin のこの言葉こそ、各国共通の親の会の最も重要な目的です。心から敬意を表します。

その上で日本以外の国はファウンデーション活動を基本としています。寄付を募る活動は様々なイベントを通して行われ、基金は川崎病の早期診断、早期治療、診断ガイドラインや治療の質の向上のために、それぞれの国の専門家によるリサーチセンターに寄付され

ます。

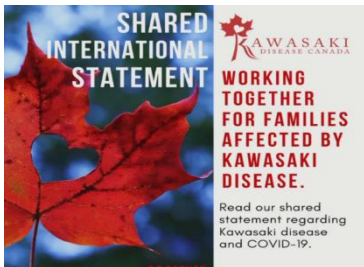
川崎病は日本に比べ、今もアンコモンと言われることのある病気です。そのため、どの国も川崎病啓発活動は精力的に行っています。アメリカは45,000枚のKD症状の写真入りポスターを作成、全米に配布したり、イベント会場で紹介しています。オーストラリアは広い国ですが、各州や地域にコーディネーターがいて、ネットを最大限活用しています。ラジオ、テレビ、雑誌等でも川崎病の情報を配信したり、ドクターとKD家族のトークビデオを作り希望者に配信しています。

国際川崎病啓発デー1月26日は10年前に制定され (川崎先生が最初の川崎病患者を診た日にちなむ) 各国でイベントが行われています。2020年のこの日、カナダではKDについて正しい知識を得るためのキャンペーンがWebによるセッションで、イタリア、イギリスの団体とも連携して行われました。

各国の活動の中で、アメリカのKDF Youthのリーダー (妹が川崎病) は「若い人、ティーンエイジャー」への啓発活動を行っています。Webサイトを駆使し、インドやレバノンにもメンバーがいます。これからの活動を考える上で示唆に富んだスピーチでした。「川崎病の子供たちが迷ったり孤独にならないように」との言葉が印象的でした。



昨年のコロナ感染症パンデミックでは、オーストラリアではサイトへのアクセスが20%増え、川崎病との関連やワクチンへの質問を受け、連携している専門医が相談に乗っています。カナダでは、不安を感じた家族に対して「川崎病と COVID-19」と題して、子ども病院のドクターから声明を出しています。この公式な声明を共有し、正しい知識を得るためのキャンペーンが、スペイン始めヨーロッパの親の会と連携して行われました。今後の活動については、どの国にも共通する取り組みとして、成人した川崎病罹患者のサポート、川崎病罹患者の先輩としてのアドバイスの重要性、各国の連携などが示唆されたと思います。



計画の初めから海外の会との交渉、運営のすべてを、会長の鮎沢衛先生、中村好一先生にお任せして当日を迎えました。当日は吉兼由佳子先生と清水千里先生の司会により、滞りなく終えることができました。心から感謝申し上げます。2024年第14回国際川崎病シンポジウムでは、今回の参加者に会えますように。  
(川崎病の子供をもつ親の会)

Japan Kawasaki Disease Research Center  
Japan Kawasaki Disease Research Center



目的：  
川崎病の原因を明らかにし、  
原因療法を用いた検査の  
補助診断法の確立、予防法  
による予防法の完成を目指す。  
夢とロマンを求め、  
2000-10-13 鮎沢衛



Japan Kawasaki Disease Research Center  
Japan Kawasaki Disease Research Center

ニュースレターNo.43をお届けいたします。  
ご意見ご感想をお寄せ下さい。



## 事務局から

### 【センター日報】

- 2021年5月7日 2021年度第1回理事会開催 5:00pm～（於:当センター） Zoom 会議  
2021年6月5日 2021年度総会と研究報告会開催（於:当センター） 1:00pm Zoom ウェビナー  
各年度の事業報告及び会計報告、次年度の事業計画及び予算計画は総会議事録と共に  
当センターでいつでも閲覧できますので、お気軽にお立ち寄りください。
- 2021年8月20日 2021年度公募研究選考委員会開催 5:00pm～（於:当センター） Zoom 会議  
2021年8月20日 2021年度第2回理事会開催 5:30pm～（於:当センター） Zoom 会議  
2022年3月11日 2021年度第3回理事会開催予定 5:00pm～（於:当センター） Zoom 会議

### 【特定非営利活動法人日本川崎病研究センター会員総数】 2021年12月末現在

[正会員：71名、2法人、3任意団体]：[賛助会員：98名、1法人、0任意団体]

### 【学会・研究会・国際シンポジウム】

- ★ 第46回近畿川崎病研究会 2022年3月5日（土）13:00～ 於：グランフロント大阪  
運営委員長：津田悦子先生（国立循環器病研究センター小児科）
- ★ 第42階東海川崎病研究会 2022年5月14日（土）14:00～ 於：名古屋国際センター  
代表世話人：加藤太一先生（名古屋大学小児科）
- ★ 第41回関東川崎病研究会 2022年6月11日（土） 於：日赤医療センター講堂  
会頭：三浦大先生（東京都立小児総合医療センター）
- ★ 第42回日本川崎病学会 2022年9月30日～10月1日 於：大宮ソニックシティ  
会頭：松原知代先生（獨協医科大学埼玉医療センター小児科）
- ★ 予定：第14回国際川崎病シンポジウム 2024年 月 日 於：開催（カナダ）  
会頭：Najib Dahdah, MD ・ Adriana Tremoulet, MD
- ★ 「川崎病の子供をもつ親の会」 問い合わせ先：Tel：0467-55-5257

**新会員募集にご協力ください!!!**

**正会員 年会費 20,000円**

**賛助会員 年会費 5,000円**

### 【川崎病に関するご相談】

専用アドレスを開設しました。<[kdcentersoudan@gmail.com](mailto:kdcentersoudan@gmail.com)> 担当理事が、随時返信でお答えさせていただきます。電話・Faxによるご相談はご遠慮ください。

特定非営利活動法人日本川崎病研究センター  
〒101-0041 東京都千代田区神田須田町 1-1-1 久保キクビル 6階  
Tel:03-5256-1121 Fax:03-5256-1124